

# 「森」の「カタチ」を みん ev

**JILA**

中部支部 サマースタジオ

2019





学生デザインワークショップ

**サマースタジオ** 2019

**LANDSCAPE**

**SUMMER**

**STUDIO**

公益社団法人日本造園学会中部支部

**8/20~23**

**LSS2019**

## 「森」の「カタチ」を考える

「森」と聞いてどんな風景を思い浮かべますか。「森」は不変のものではありません。古来よりさまざまな「カタチ」の「森」がわれわれとの関係にうみだされてきました。しかし、高度成長期以降その関係性は希薄となり、人口減少とともに「森」は新たな荒廃へと向かっています。一方、「環境」ということばが身近になって久しいものの、目指す空間像は未だ不明瞭のままです。

そこで、今回は「森」について今一度考えなおすことからはじめてみることにします。これからの「森」には、どのような「カタチ」がふさわしいのか、「場の読み解き」を行いながら探ります。「場の読み解き」は建築・土木・アートに限らずすべての「カタチ」のはじまりの行為であり、「場の読み解き」からいかにロジックを構築し説明可能な「カタチ」へと昇華させていくかがキーになります。

対象地の周囲には、窯業のまちであり、国指定史跡「小長曾陶器窯跡」や愛知高原国定公園、東海自然歩道など、資源となるポテンシャルがある中で、それらをいかに資源化するか、そのインターフェイスとしてのデザインを期待します。

対象地：東京大学演習林生態水文学研究所の苗畑跡地（含む国史跡小長曾陶器窯跡）

愛知県瀬戸市北白坂町 1-1

主催：公益社団法人日本造園学会中部支部

共催：東京大学大学院農学生命科学研究科附属演習林生態水文学研究所

企画：水内 佑輔：東京大学大学院農学生命科学研究科 附属演習林 生態水文学研究所 助教

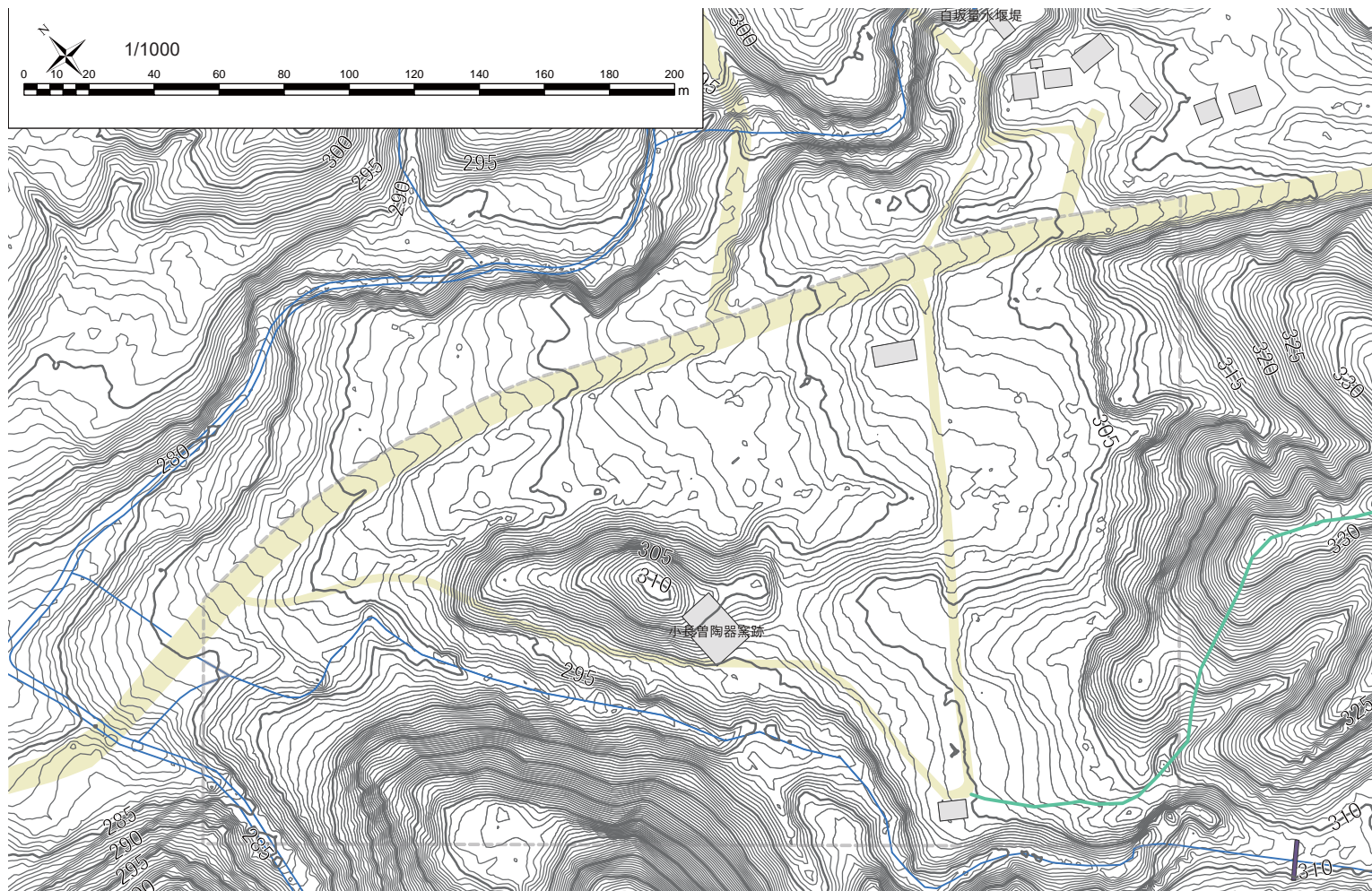
造園学会中部支部常任運営委員

日程：2019年8月20日～8月23日

参加費用：3000円（宿泊、飲食費代など）

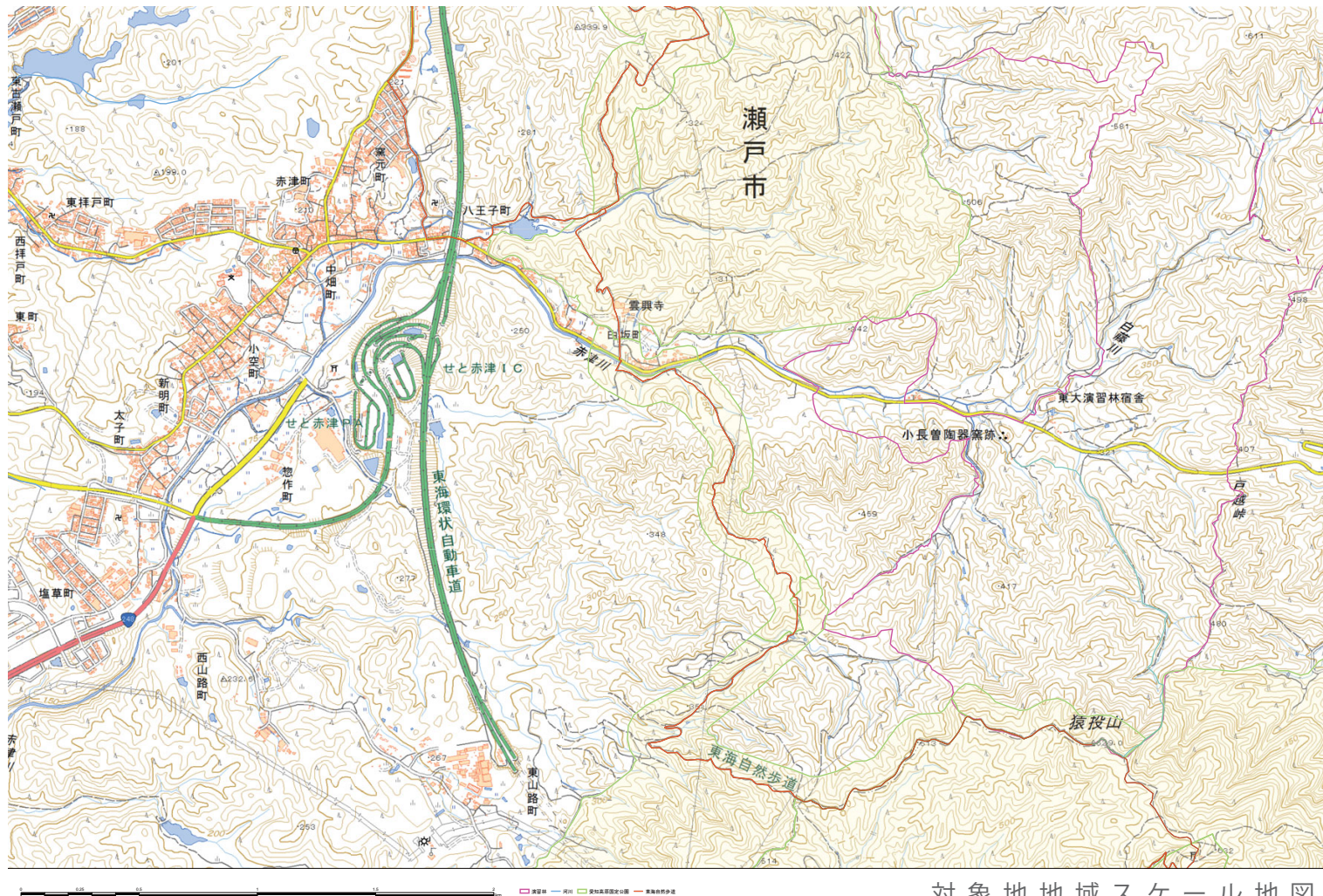






対象地地図





対象地地域スケール地図





視点の変化による景観資源





広がりを持つ視点





水系による地形の顕在化





人工林が生み出す空間の面白さ



## 場所の記念







樹木の対比が生み出す空間



# 1 日目

## リサーチフェイズ

午前：プログラムやサイトのオリエンテーション

対象地のバックヤード猿投山ヘリサーチハイキング  
生態水文学研究所職員による演習林の解説。

午後：対象地の見学

プレリサーチ成果のショートプレゼンテーション

夜間：交流を目的とした歓迎会を行う



# 2 日目

## アイディエーション

午前：資源探査のグループサーベイ。位置情報画像のアーカイブアプリを使いつつ、対象地の資源を発見・記録し、対象地のポテンシャルを測る

午後：サーベイ結果のプレゼンテーション  
デザインコンセプトの設定

夜間：グループミニプレゼンとチューターによる講評





## 3 日目

### コンセプトの視覚化

午前：対象地のコンセプトを定め、デザインダイアグラムによる視覚化を行う。

午後：同上。グループごとに適宜エスキースを行う。

夜間：グループミニプレゼン



## 4 日目

### 最終プレゼンテーション

午前：発表資料の最終調整を行う

午後：講評会

パースとダイアグラムを製作物としたプレゼン







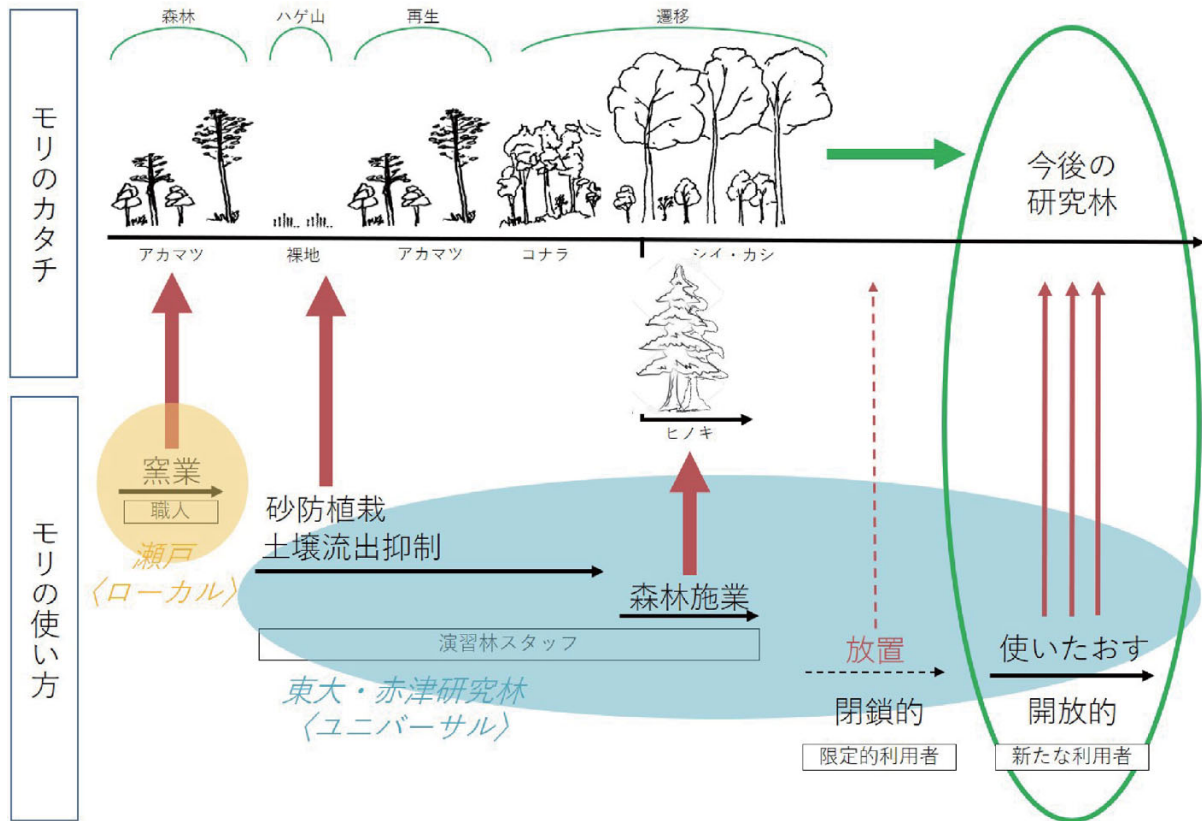
## さとやま自由研究

### コンセプト

東大演習林を、使われなくなってしまった里山のプロトタイプとして作り変え、地域に開けた新しい里山を提案する。

四方勘太 安原有紗 山田幸長 生熊洋介 未利用地となってしまった里山としての東大演習林を、管理者と利用者の双方の立場から再び使い倒す。





遷移のダイアグラム

対象

一般的なイベントや飲食（仮説）など。または公に実験や研究を行いたい企業や大学。大学生の参加により産学の連携を図る。

設計

東大演習林の管理者（研究者）は最新技術を駆使した実験（レベル5の自動運転の試運転など）を実施しながら、一方で演習林利用者の動向を観察。これからの日本にとって最も適した里山管理とは何かを実験的に調べていく。展望として、最適な里山管理の手法が日本全国へ波及することで東大が里山管理の最前線になると良い。



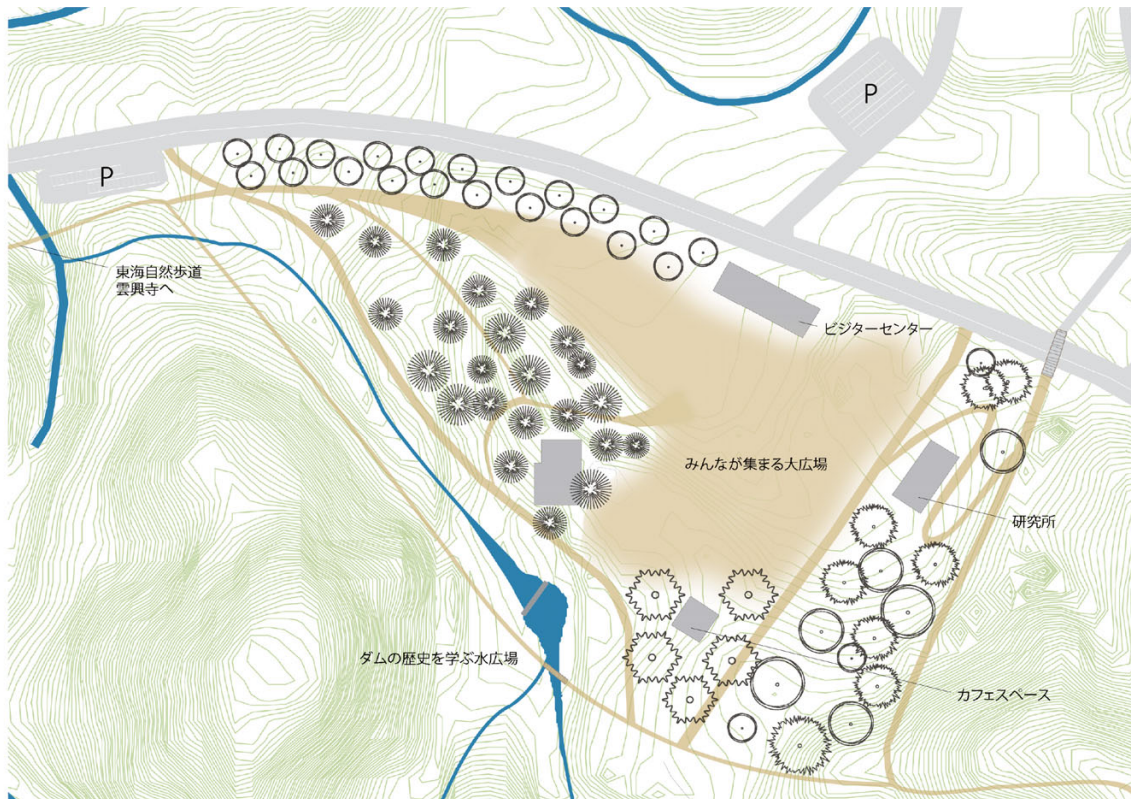
道路に面するビジターセンター  
東大演習林の顔であり、体験と  
知識を繋げる場

赤松の森。  
窯跡と赤松の歴史を学ぶ

研究所の活動は大広場に広がり  
研究内容について体験を通  
じて学ぶことができる

スギ、ヒノキの林。  
自然林と人工林の境界となる林

コナラの林。  
涼しく心地よい空間がカフェ  
スペースを包み込む

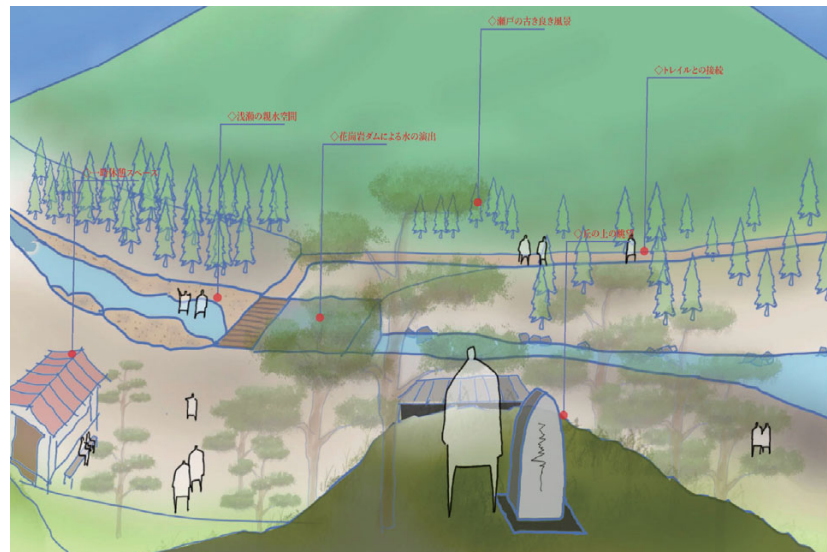
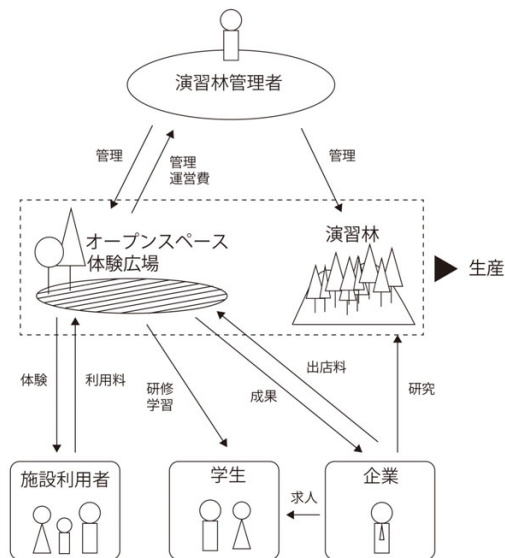


利用者（観光客）は最新技術（ドローンを飛ばしてみるなど）に触れることができる。ターゲットは子連れの家族であり、夏休みの自由研究の感覚で山に遊びに来る。

また東海自然歩道のスタート地点であり中継地点でもあるため、最新技術のみならず、歴史を感じさせること（ダムを利用した水辺広場など）で演習林についてもっと多くに人、世代に知ってもらう。

このように管理者、利用者双方の立場を明確にした施設を提案する。





## スキーム

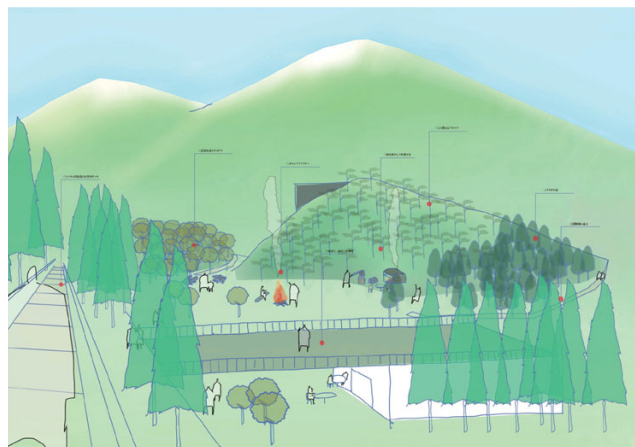
### 東大の役割

→研究、観察および演習林の管理+設置許可  
演習林の入場料および区画を貸し出す事による収益で回す。

例) 花崗岩ダムによる水の演出と浅瀬の親水空間でこの土地と、水の処理施設や研究施設の歴史を体験的に学ぶ

↓

すでにある歴史的背景や自然的遺産を利用し、自らの土地で経済を回す研究施設となる。







食卓から森へ

久保田貴大 高木里美 高橋宏太郎 徳永啓佑 細見恵一郎



## 01 東大演習林の新たな役割

幼少期の原体験



将来の郷土愛



—豊富な自然環境を持つ演習林を利用した原体験—



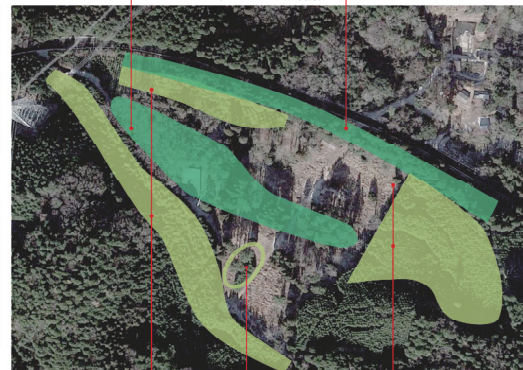
現在植栽ゾーニング



ヒノキ植林 / 垂直性のある林



二次林 / モチツツジアカマツ群集  
ケネザサコナラ群集



二次林 / モチツツジアカマツ群集  
ケネザサコナラ群集

二次林 / 道路とのバッファ

外国産杉 / 垂直性・高さがあるため、象徴的  
ヒノキ植林 / 垂直性のある林

## 02 利用者の想定プログラム

### ■瀬戸市民（宿泊）

#### 共通のプログラム

受付 → 各アクティビティ → 昼ごはん → 各アクティビティ → 夜ごはん

### ■東京大学学生

受付 → 砂だし 各種教育プログラム → 昼ごはん → 砂だし 各種教育プログラム → 夜ごはん

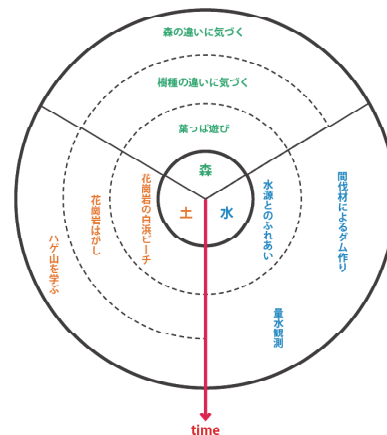
### ■瀬戸市民（日帰り）

受付 → 各アクティビティ → 昼ごはん → 各アクティビティ → 受付

### ■東海自然遊歩道利用

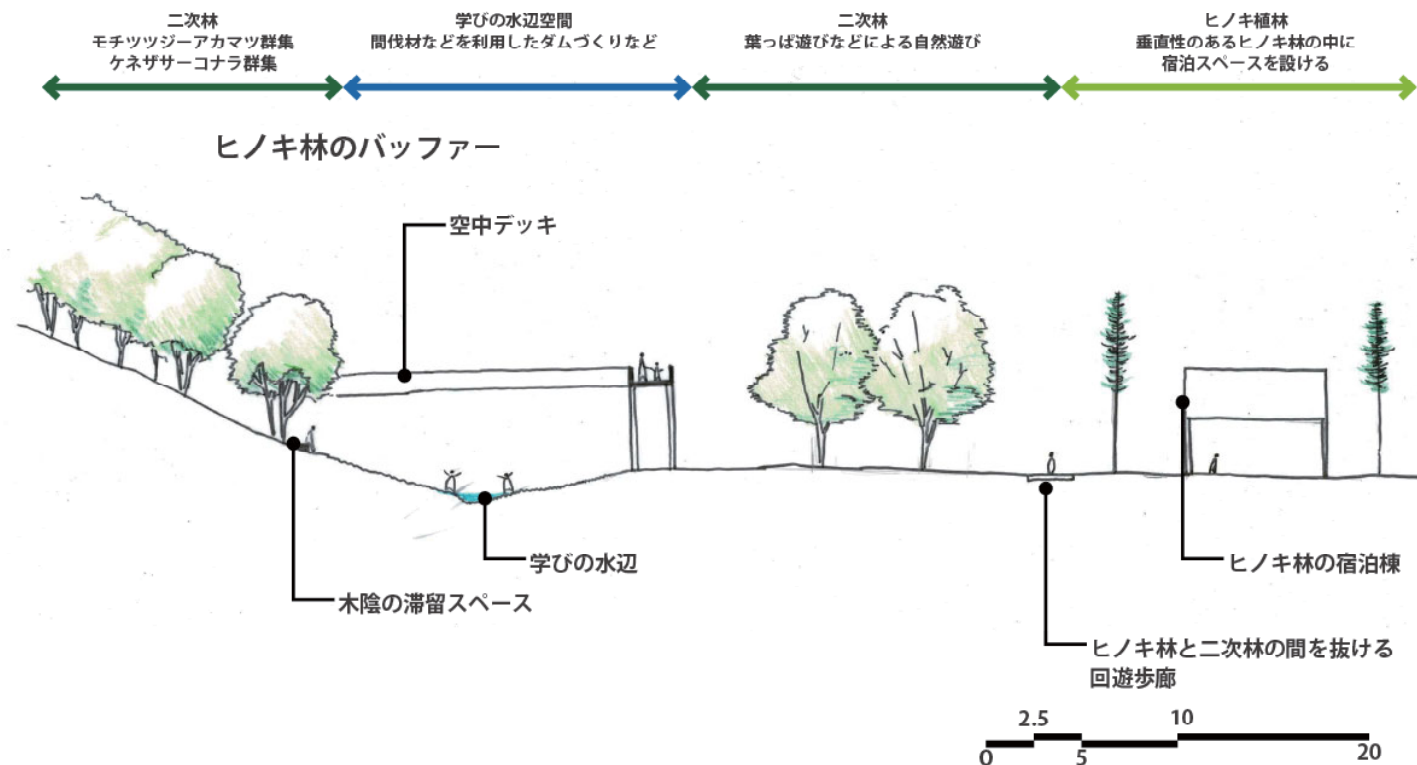
受付 → 風呂 → 昼ごはん → 受付 → 帰宅

アクティビティの年輪





### 03 断面構成



断面イメージ A





## 04 演習林体験プログラム



毎日食卓で手に取る器は、あの森と繋がっている。

窯業の燃料として使われた山は、禿山と化し東京大学は山の再生を課題に 100 年余りの時をこの地に費やしてきた。これまでの流域整備のノウハウや実測データといった知の蓄積を広く開いていく体験学習の場としながら、トレイル参加者の通過点としても安らげる場となることを期待する。

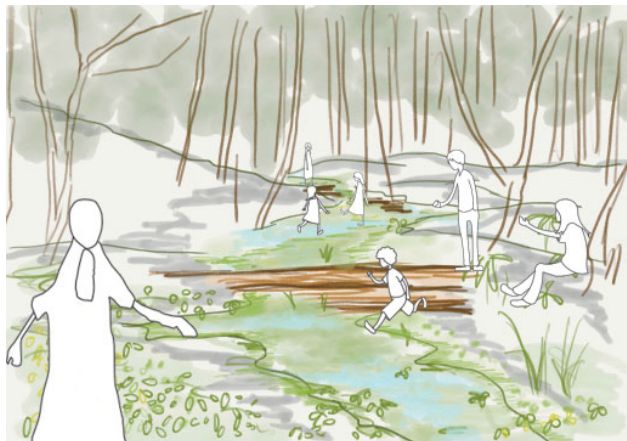
下流に暮らす瀬戸市の家族を対象に、来訪者は火起こしから食と向き合う。沢での簡易ダムづくりや、水流検査を通し自然と触れながら、山や川の様子を観察してゆく。  
窯丘の尾根沿いの宿泊施設や、視点場から森を一望する浴場で、ヒノキ植林や二次林、様々な種からなる森の表情を捉えることができる。



①ビジターセンターへ抜けるヒノキ林の小径



④窯丘（二次林）の尾根にある宿泊施設



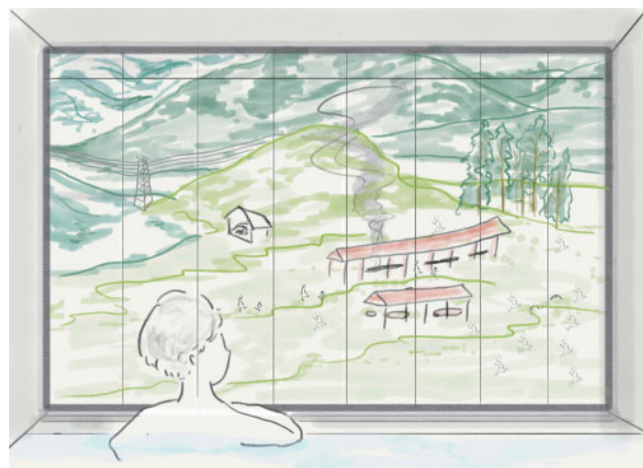
②水辺の学びゾーンで行うダムづくり



③水辺空間からペDESTリアンデッキをのぞむ



⑤遊びの水辺空間沿いのだんだんウッドデッキ



⑥入浴施設から望む瀬戸の風景



## 最終講評者



岡田 憲久

名古屋造形大学特任教授

信州大学農学部林学科造園研究室卒業。

京都にて作庭修行後、名古屋にてランドスケープの設計事務所勤務を経て名古屋造形大学大学院教授、2016年より現職

1989年より景観設計室タブラ・ラサ主宰

2011年日本造園学会賞『武田薬品研修所・全体景と石庭「九山八海の庭」』

2011年愛知県芸術文化選奨文化賞

2013年度都市公園コンクール国土交通大臣賞「東海市太田川駅前広場」



熊谷 玄

STGK Inc. 代表 / チーフデザイナー

1973年横浜生まれ。現代美術作家・崔在銀のアシスタント、EARTHSCAPE INC. を経て、2009年 STGK Inc. (スタジオゲンクマガイ) 設立。ランドスケープデザインを中心に人の暮らす風景のデザインを行なっている。主な仕事に「左近山みんなのにわ」、「みなまき みんなのひろば (南万騎が原駅前広場)」、「グランモール公園」、「have a Yokohama (横浜駅西口仮囲いプロジェクト)」など。



出村 嘉史

岐阜大学工学部准教授

専門は、都市形成史・景観計画。京都大学工学部、同大学院を経て、博士（工学）取得（2003）。京都大学助手・助教、英国シェフィールド大学客員研究員を経て現職（2008～）。2015年から毎年「岐阜の石積み学校」開催。2016年、岐阜市街地の古ビルをDIYでリノベーションして研究室「美殿町ラボ」をオープン。2017年から「柳ヶ瀬を楽しいまちにする株式会社」取締役。2018年から mitonobase（若者の創業を支援する任意団体）代表、2019年から風景塾（土木・建築・造園のデザインシャレット）副代表。

## チューター



相田 明

岐阜県立国際園芸アカデミー

東京農業大学大学院農学研究科博士後期課程修了、博士（造園学）。同大学造園科学科助手を経て、現在に至る。現代アート作品として、現地の土で作った日干しレンガが崩れ、埋土種子が発芽し、自然に還る『遷移/succession』（大地の芸術祭「越後妻有アートトリエンナーレ 2009」出展）シリーズ、ほだ木で作った家具などが自然に還る『キノコ』シリーズがある。



大野 暁彦

名古屋市立大学 専任講師

千葉大学大学院園芸学研究科博士後期課程修了、博士（農学）。中央大学理工学部助教を経て、現在に至る。2015年より設計事務所エスエフジー・ランドスケープアーキテクト代表取締役。代表プロジェクトに、『太田市美術館・図書館』（グッドデザイン賞）、『リノア新松戸』（松戸景観優秀賞）、『新代田ポケットナーセリー』（国土交通大臣賞）など。著書に『日本の美しい庭園図鑑』など



水津 功

愛知県立芸術大学 教授

東京芸術大学大学院修了後、大手企業で設計事務に従事した後、デザインスタジオ watermarkdesign を設立と同時に愛知県立芸術大学で教鞭をとる。瀬戸内国際芸術祭では古い民家をアートサイトに再生させ“MEGIHOUSE”をデザイン。現在は、自然と人口、過去と現在など、異なる要素間で互いを高め合うようなデザインや手法に関心を持つ。



## 参加者



四方 勘太  
名古屋市立大学

安原 有紗  
東京大学大学院

細見 恵一郎  
名城大学

久保田 貴大  
鳳コンサルタント株式会社

山田 幸長  
岐阜大学大学院

高木 里美  
名古屋市立大学大学院

生熊 洋介  
信州大学

高橋 宏太朗  
東京農業大学大学院

徳永啓佑  
名古屋市立大学

発行 公益社団法人日本造園学会中部支部

発行日 2020 年 2 月 27 日

発行人 夏原由博

〒 468-8502 愛知県名古屋市天白区塩釜口 1-501

名城大学農学部ランドスケープ・デザイン学研究室 気付

編集 大野暁彦 水内佑輔 四方勘太 高木里美



